

## 講評

## I

出典 加藤周一『日本文化における時間と空間』、岩波書店、2007年

美学と思想史の角度から日本の近代以降の歩みを再考し、日本文化の特徴を時間と空間の2つの面から考察する書です。論旨は明快で、よく読めばさほど読解に苦勞しない文章です。

問1【漢字の書き取り問題】(解答番号は1~5)

正確に書けている解答は少なく、全問正答した受験者はいませんでした。

問2【空欄補充問題・前後の文脈から適語を考えその組み合わせを選ぶ】(解答番号は6)

空欄IIの2行後にある「時間は一画面の右から左へ流れる」がヒントです。正答率は65%でした。

問3【空欄補充問題・前後の文脈から適語を選ぶ】(解答番号は7)

空欄の2行前の「一場面において完結していて、他の場面とは関係がない」から正答を導けるでしょう。正答率は56%でした。

問4【空欄補充問題・前後の文脈から適切な言葉を選ぶ】(解答番号は8)

空欄の後の「神は人間の創り方に失敗した」がヒント。正答率は84%でした。

問5【文脈把握と内容理解に関する問題】(解答番号は9)

「全く同じ手法」とはもちろん異時同図である《吉備大尽入唐絵巻》の手法です。ただし、「西洋では時間が左から右へ流れる」ので③は不正答です。正答率は58%でした。

問6【内容を理解して該当するものを選択する問題】(解答番号は10)

本文を読めば該当するのは《吉備大臣入唐絵巻》であるとわかるはずです。①は前後する二つの出来事ではなく、多数の出来事の前後関係のことになるので不正答。正答率は28%でした。

問7【言葉の意味を答える問題】(解答番号は11)

「縁起が悪い」という使われ方をする「縁起」ですが、ここでは直前にある「寺社の」という言葉を踏まえる必要があります。正答率は32%でした。

問8【指示語の内容を考える問題】(解答番号は12)

直後に「記憶と予感はあるが」とあるので、現在眼前にある場面であると気づくのはさほど難しくありません。正答率は44%でした。

問9【文脈把握と内容理解に関する問題】(解答番号は13)

傍線部Eに続く2つの文を読めば正答を導けます。正答率は39%でした。

**問10【文脈把握と内容理解に関する問題】**（解答番号は14）

傍線部Fの2行後ろにある「著しい『今』の強調」「全体よりも『部分』への強い関心」がヒントです。正答率は37%でした。

**問11【小見出しを選ぶ問題】**（解答番号は15）

本文を読めば絵画や時間が中心的なテーマであることは明白です。正答率は30%でした。

**問12【内容合致問題】**（解答番号は16）

誤答として②・③・⑦を選択している人が目立ちました。西洋では異時同図が一般的で異時図並列はほとんど採られなかったというような記述はないので、②は不正答。③は異時図並列ではなく異時同図の手法です。⑦は「絶対的な意味を持っており」が本文の内容に合致しません。正答率は完答ということもあって16%でした。

## Ⅱ

出典 佐々木力『科学論入門』、岩波書店、1996年

数学理論の「不完全性」と自然科学理論の「決定不全性」を踏まえて、自然認識における数学的方法の限界性が説明されています。近代における数学的自然学の熱狂と成功が、アリストテレスによる質料についての言及を忘れさせたのでは、とする文脈を明確に理解することがポイントです。以下では、説明が必要と思われる設問のみ解説しておきます。

**問1【漢字問題】**（解答番号は17～23）

正確に書けている解答は少なく、全問正答した受験者はいませんでした。

**問4【前後の文脈から適切な文を選ぶ問題】**（解答番号は28）

直後に「すなわち」として言い換えているのは、実験だけでは真偽の判定にとって不ジューゼンつまり不完全であるという内容です。一義的な決定を否定する文が入ります。正答率は35%でした。

**問6【前後の文脈から適切な文を選ぶ問題】**（解答番号は30）

ヴィーゴとの共通性を考慮すれば、自然と人間と自然科学との関係をどのように把握すればいいかが解答のポイントになります。「それ（自然）を人間は作れない。」という言葉がヒントです。人間の存在以前に自然が存在していた事実を思い起こす必要があります。存在の時間的な前後関係を確認しましょう。正答率は9%でした。

**問8【内容理解に伴う傍線部の説明問題】**（解答番号は32）

数学理論は「不完全性」を「払拭できない」が、自然科学理論は「不完全性」を「払拭できる」とする文脈です。①・④・⑥は文意と異なります。②・③は数学理論の「不完全性」の理由が、本文の記述からは読み取れない表現になっています。正答率は33%でした。

**問9【内容理解に伴う傍線部の説明問題】**（解答番号は33）

前の段落で、クワインの主張を「自然科学理論の個々の言明の妥当性は別々には判定できず、理論全体として初めて判断される」と言い換えています。正答率は47%でした。

**問11【文脈把握と内容理解に関する問題】**（解答番号は35）

①外的世界は一つの集合体として感覚的経験的に認識されるのであって、感覚的経験を一つの集合体であるとする記述は本文にはありません。④数学的方法による自然の探究は単に「真らしいもの」の認識であり、限界があるというのがヴィーゴの主張です。正答率は2%でした。